
呪われた少女の世界

水無月なづき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われた少女の世界

【Nコード】

N8919P

【作者名】

水無月なつき

【あらすじ】

魔法はいずれ解ける。

それは呪縛から永遠に逃れられないことを意味していた。

「コンスタンティノープルを陥落させ東ローマ帝国を滅ぼしたオスマン帝国第七代皇帝は？」

「カエサル」

「えっ？ ちょっと待って。よく聞こえなかった」

「……カエサル」

「カエサル？」

「……」

「カエサルって古代ギリシャでしょうがああああ東ローマ帝国の滅亡は十五世紀！ 時系列的に考えてありえないから！」

「えっ、そうなんだ。ナポレオンと同じくらいだと思ってた」

「ナポレオンは十九世紀ね」

「それってすごいの？」

「すごい。三五〇年も過去に遡って東ローマ帝国を滅ぼしたりしないの。分かる？」

「でもとりあえず知ってる名前書いておけばどれかは当たるかもしれないじゃん」

「残念。今度の試験範囲ではナポレオンもカエサルも出てきません」

「じゃあチンギスハーン」

「それも違う！ ……はあ。こんなじゃ赤点取りもするわ」

凜は深くため息をついた。

「う、ごめん……」

私はもう何度目かになる台詞を繰り返す。

私と凜は放課後の誰もいなくなった教室で二人居残っていた。私たち以外には運動部の人たちの席に置かれたままの荷物や、何時間も前に書かれたような落書きが後ろの黒板にあるだけで、廊下を横切る人影も見えない。

窓の外ではもう薄暮が迫ってきていて、にごった薄い空にはぼん

やりとオレンジがかかったような雲が浮かんでいる。今の季節はこの時間になると、窓から差し込んできた西日が教室の中に細長い影を落とす。シャーペンやら消しゴムやらの影が大げさに引き伸ばされて机の上に映される。教科書にペンを走らせるたびに机の上で踊る細い影で私は気が散って仕方がなかった。

「今度の期末で巻き返さないとまた三者面談とか冬休み返上で補習とかになるよ」

「三者面談といえば、中国にサンメンシャダムっていうのがあるよね」

「世界史のテストでは出てこないから安心してね」
「ううー……」

私は机に突っ伏した。教科書を赤く塗りつぶしたマーカーのインクの匂いがする。成績優秀な凜に勉強を教えてもらいながら私は赤いマーカーで教科書に逐一チェックを入れていったのだが、全部が全部真っ赤になってしまっただけは意味がない。

「凜は中間試験の世界史のテスト何点だったの？」

私は顔を上げて腕にあごを乗せながら言った。

「八十二。律は？ 赤点なのは聞いたけど」

「……………二十五」

「いわゆる四択問題を全部あてずっぽうに答案したときの点数？」

「いや、あてずっぽうじゃないし！ 全部実力だし！」

「なお悪いわ」

「やれやれ、と凜は肩をすくめた。

「にしてもさ、凜って全然色ペン使わないよね。そんなんでどうやって覚えてるの？」

私は凜の机の上に開かれた教科書を見て言った。見たところ凜の教科書にはマーカーはおろか、赤ペンなどによる書き込みも一切されていない。ただシャーペンの黒い文字でいくつか下線が引かれているだけだ。凜くらいまめな人なら何色ものペンを使い分けて綺麗にまとめてるだろうというイメージがあったので、私は意外だった。

「面倒くさいからね、そこまでするのも」

「ふうん……」

私は凜の教科書を手にとってぺらぺらと適当にめくってみた。最初のほうのページこそ赤ペンやマーカーでチェックが入っているもの、あるページを境に色ペンの痕跡は唐突に途絶え、まるで途中から別の人が使い始めたかのようなだった。凜もマーカーと併せて使うタイプの半透明な下敷きを持ってはいたが、私は彼女がそれを下敷きとして以外の用途で使うのを見たことがない。案外本当に面倒くさがりなのかもしれない。

「それより、他に赤点だった科目は？」

「えつとね、あとは化学と英語と数学と物理かな」

「化学と物理は諦めよう」

「英語と数学も諦めよう」

「おい待てやめろ」

「えー」

私はけらけらと笑い出した。

「それじゃ、私そろそろ行くから」

凜は立ち上がって向かい合わせにくっつけた机を元の位置に戻し始めた。

「ああ、うん。頑張つてねー」

荷物をまとめて教室を出て行く凜を私はぼけーっと見送った。運動場のほうから一定のリズムで鳴るホイッスルの音が窓越しに聞こえてくる。

私は正面の黒板の上にかけられた時計を見てから、私も部室に顔を出しておくか、と思い机の上を片付け始めた。

私は部活に対しては凜ほど真面目に打ち込んではいない。何しろ部員が私と真夜先輩の二人しかいないのだ。去年は他にも部員が一人いたらしい。おそらく当時三年生の先輩と真夜先輩の二人だったのだろうと思う。

白い絵の具が切れてしまったので、私は部室として使われている美術準備室に予備の絵の具を取りに行った。

この部室は午前中から昼過ぎにかけては日差しがきつく、夏場は特に蒸し暑い。構造上、日当たりがよすぎる上に、狭くて風通しが悪いからだ。しかし今は十一月の夕方。窓辺は完全に日陰になっており、日の当たらない部屋の中は室内灯をつけなければまるで真っ暗闇だ。

私は部屋の電気をつけた。下宿生の住む安いワンルームのような細長い空間で、廊下側の壁に沿って小さいロッカーが格子状に並んでいる。窓辺に置かれた長机の上には古ぼけた画材やよく分からない分厚い洋書の類なんかが雑然と積み重ねられていてその上から色あせた黄色いカーテンが覆いかぶさっている。机の下には工具や金物が入れられたダンボールの箱や誰が描いたのか分からない板絵が積み重ねられており、その脇には大きなクラフト紙やケント紙、ファインペーパーなどを丸めたものがいくつも立てかけられている。

私は自分のロッカーにある予備の絵の具を探った。鍵はいちいちかけていない。目当ての絵の具はチャート式だのデータブックオブザワールドだのといった分厚くて重たい割に普段使わないような教材の下敷きになっている。勢いをつけて絵の具だけ一気に引き抜こうとしたところ、その上に重なっていた教材の類も一緒に引っ張られ、ばらばらと音を立てて床の上に散乱してしまった。

ただでさえいるのかからないのか分からないようなもので溢れ返っているのに真夜先輩も私と同じようにあまり部屋を片付けるタイプではないらしく、床に散らばった絵の具を拾って元通り数を揃えるのに私は少し手間取った。

絵の具を片付けているあいだ、部員の過去の作品と思われる絵が机の下に置かれているのが目に留まった。同じ高校生が描いたとは思えないほど上手い絵だ。最初は真夜先輩が描いたものかと思っただけが、よく見ると絵のタッチや色使いが微妙に違う。それがなぜかは分からないが、どこことなく奇妙さを思わせるような色彩だ。ここま

で上手い絵を描くのは真夜先輩以外に思い浮かばなかったが、なぜだか彼女とは違ったもつと別の人が描いたような、そんな違和感がある絵にはあった。それにこれは水彩画ではなく木製パネルにアクリル絵の具で描かれたものだ。私はパネルをひっくり返してみた。名前の文字はかすれて全く読み取れないが、日付と学年を見ると去年の一年生が描いたものらしい。

「なんだ、やつぱり真夜先輩のか。なんだか今とは雰囲気違うなあ」
私は絵を元の場所に戻してから、当初の目的だった白い絵の具を持って美術室に戻った。

こびりついた絵の具と糸鋸の傷がついた大きなテーブルの上で画用紙を広げて真夜先輩は海辺の街らしき絵を描いていた。灰色の空が塗られた画用紙の角の部分は絵の具の湿気で反り返っている。

しゃこしゃここと筆洗をかき回し水を切って絵の具雑巾の上に筆を置くと、真夜先輩は椅子を引いて背伸びをした。そして鞆から魔法瓶を取り出すと真夜先輩は蓋を開けてコップに焦げ茶色の液体を注いだ。深煎りコーヒーの香ばしい匂いが広がってくる。

「りっちゃんも飲む？」

私と目が合うと真夜先輩はゆっくり微笑みながら言った。

喉渴いちゃうんです、と私は言った。

そう、と言うと真夜先輩は一人でコーヒーを美味そうに飲んだ。

同じコップで人に飲ませるとか気にならないんだろうか。私が神経質なだけかもしれない。

「なかなか難しいものだよね」

真夜先輩が一息ついてから言った。

「見たままの色を塗れば印象の薄い平板な絵になってしまう。強調しすぎるぐらいの色遣いでやっと丁度いいくらい。現実にはそこには存在しない色を塗って初めて、現実らしくなってくる」

真夜先輩は汚れの染み付いた絵の具雑巾で絵筆の水気を拭いながら言った。

黒板には光の当たる方向によってできる陰影の変化について先生が説明しながら書いたときの図が残されたままになっている。閉め切られた窓の向こうでは運動場でソフトボール部の部員たちが後片付けに取り掛かっていた。反対側の壁際には乾燥棚が二つある。一つは美術部員のもので、もう一つはクラスの生徒のものだ。

中学の頃まではこんなに遅い時間まで学校に残ることがなかったせいか、日が沈んで暗くなったあとの教室の中はなんだか異質な雰囲気だと未だに思う。同じ部屋なのに窓の外が真っ暗で蛍光灯の自己主張が激しくなるというただそれだけの違いで、ここがいつもの学校ではないかのよう思えてくる。

真夜先輩は魔法瓶の蓋を閉めながら続けて言う。

「だけど、現実離れた大げさな色遣いでやっとな現実味を帯びてくるのだから、本当に本当の本当を何よりも克明にありのまま映し出すのは難しい。それは映像素子による撮影ですら叶わない。レンズは人の目に映る意識を写さず、かといって絵筆はそこにある色を描かない。私が本当に求めているのは、何よりもリアルな現実なのだけれど、私の絵は私の願いを叶えてくれない」

目の前に置かれたバナナの色を作るために何も考えずに白とレモンイエローを混ぜようとしていた私は慌てて青と茶色の絵の具を足しながら、真夜先輩ほど絵が上手い人でも絵の悩みはあるものなんだなあと思った。

魔法瓶を鞆に仕舞うと真夜先輩は筆洗と絵筆とパレットを流しへ持って行って洗い始めた。私は鉛筆で描かれた絵の輪郭線の部分を練りゴムで縁取る作業に躍りになっていた。4Bの鉛筆は芯が軟らかくて折れやすい上に手の甲や紙の余白の部分がすぐに汚れてしまう。かといってHの鉛筆は黒鉛の色自体は薄い割に芯が硬く紙面を深くえぐるので濃い鉛筆以上に消しにくい。そもそもデッサンで練りゴムや消しゴムを使うなど言われればそれまでなのだが。

真夜先輩は変わった絵の描き方をする。デッサンのモデルを持つてくると、机の上で配置を変えたり窓のカーテンを閉めたり蛍光灯

の明かりを調節したりしたあとしばらくのあいだじつと凝視するのだが、いざ描き始めようというときには布を被せて隠してしまう。そしてものの十分や十五分で描き終わると、今度は布を取り払ってモデルを見ながらもう一度デッサンを描く。不思議なことに、実際にモデルを見ながら描くほうが決まって時間がかかる。二枚とも描き終わると、真夜先輩は二つの絵を並べて眉をしかめたりうなづたりしながら結局最初にモデルを見ずに描いたほうの絵を基に色を塗り始める。普通、デッサンというものは描いてる途中でただ見ているだけでは気づかない部分に直面することが多い。だから私はすごく不思議だったのだけれど、本人が言うには「実物通りに描いたのでは実物以上のものは描けない」ということらしい。私は試しに一度真夜先輩と同じやり方で描いてみたのだが、どう考えてもモデルを見ずに描いたほうの絵は自分本位な主観でごまかされた出来損ないのものに過ぎなかった。それに対して真夜先輩の絵は、モデル通りに描いた絵以上に生き生きとしていた。そしてそれは色が塗られる段階に至るとより鮮度を増す。風景画を描こうと言って外に出て行った日にも、真夜先輩は実際に景色を見ながら絵を描くことはない。私が下書きのためのスケッチをしたためているあいだ真夜先輩はただじつと景色の一点の見つめ続け、美術室に帰ってきてからようやく筆を走らせる。そこには元の景色とはまた別の新しい世界が生まれる。私が特に驚いたのは、昼間見に行った景色がモデルになっていたはずなのに、出来上がってみればそれが完全な夜景になっていたことだ。

真夜先輩の絵はどの絵も全体が同じ色をモチーフにしているのが特徴で、遠くから見るとこの絵は青い絵、この絵は赤い絵、とある程度色調が決まって見える。けれど、近くから見ると驚くほど多彩な色が使われている。現実の世界にはない、不思議な色調。それは真夜先輩の描く世界にだけ存在するものだった。強いて言うなら街全体が赤銅色に見えるような夕焼けのときのあの景色が、一番それに近い。けれど、それともまた少し違う。夕焼けの中では全て

が赤系色に見えるけれど、真夜先輩のそれは赤の中にまた別の色があつて、それも上手く調和した上で全体がひとつのまとまつた色に見えるのだ。私の絵は下書きの段階では一見上手く見えるのに対して色を塗り始めると急に素人くさくなってしまうのだが、真夜先輩の絵は逆に色を塗った途端にまるで別世界のように一気に化ける。それまでの下書きがただ細緻に描き込まれただけの平凡な絵のように見えるほど。

この美術部に入ったとき私はほとんど初心者同然だったのだけれど、先生はむしろ嬉しそうだった。新しいものを一から育てていくような、そんな楽しみを感じながら教えてくれているように思える。曰く、去年は先生が教える出番はほとんどなかったんだとか。真夜先輩は見ての通りだし、きっともう一人の先輩も絵が上手かったんだろつ。

色には様々な種類がある。明るい色、暗い色。淡い色、濃い色。濡れた色、乾いた色。鮮やかな色、鈍い色。同じ色でも味が違う。例えば透明なガラスを描くとき、ガラスの表面に反射した色と、ガラスの背景が透き通った色と、ガラスそのものの透明な色とがあるけれど、それらは全て違った色だ。素材のガラスは透き通った無色だけれど、ガラスという物体は無色じゃない。周りの景色を反射・屈折させた色が集まって私たちはガラスの色を見ているのだ。ガラスに映る色と周りの景色の色との微妙な違いが「同じ色でも味が違う」ということになるらしい。水も空気も透明だけど、海には海の空には空の色がある、というのと大体同じだと思う。

不透明水彩においては、絵の具の中で一番使う色は白で、一番使わない色は黒だ。黒は他の色を暗く染めていく力強い色だ。その際、黒はほんの少しの量でいい。そんな風に先生から教わったとき、私は黒という色の深さを知った。私が今まで思っていた以上に黒という色には永遠に遠く続くかのようなグラデーションを持っていた。極端に言えば、そもそも黒なんて色を使わなくても、いくらでも黒に見える色は作り出せるのだ。

「そのバナナ、描き終わったら食べちゃうの？」

私がバナナの色と絵の具の色を交互に見比べながら何色もの絵の具を混ぜ合わせていると、真夜先輩が聞いてきた。

ええ、いつまでも置いておいたら痛んじゃうんで、と私は答えた。エチレンは伝染する。だからだと時間をかけているうちに私まで腐ってしまいそうになる。

「実際に食べてみてからのほうが、いい絵が描けそうだけどね」

パレットを拭きながら、真夜先輩が言った。

私は曖昧に笑いながら、それって本来のものと趣旨が変わってませんか、と言った。

「確かにデッサン本来の趣旨とは違うけどね」

画用紙を乾燥棚の隙間に入れると、真夜先輩は一つに束ねていた髪をほどいた。濡れたように黒く長い髪は結わえられていた部分がほんの一瞬たわんだが、やがて重力にしたがってまっすぐに下りた。「その味、舌触り、内部の構造、匂い、胃の中に落ちたときのあの感触、それが体にもたらす影響……せつかく食べられるものがモチーフになっているのなら、実際に口にしてみたほうがよりリアルな絵を描くための材料が得られるとは思わない？ ただ見ているだけでは分からないことも多いでしょう。ねえ、赤ちゃんってさ、興味のあるものは何でも口に入れちゃうでしょう？ あの頃のこと覚えてる？ 指とかを口にくわえているときの感覚って、それを目で見ているだけのときとは随分感じ方が違うんだよね。さくらんぼとか丸ごと口の中に入れたまま舌で転がしていると、これって本当にさくらんぼなのかなあ、とか思ったりしない？」

真夜先輩は妖しげに微笑みながら自分の鼻先でうねうねと人差し指を曲げ伸ばしする。私は真夜先輩が口の中でさくらんぼを転がしているのを想像して、なんだか気恥ずかしくなって視線をそらした。窓の向こうでは暗褐色の雲に覆われた朧月がぼんやりと揺らいでいた。

入学してから最初の席順は出席番号順で決められる。つまり、名前の順だ。

教室の黒板に張り出された紙には「冬城凜」の一つ前に「一花律子」の名前があった。私の名前だ。

割り振られた位置の席に着くと、後ろの席の人が物珍しげな風に話しかけてきた。軽い挨拶を交わしながら、名前なんて読むのって自分でもあんまり気に入っていないけれど、まあこの名前を見たらそう思うだろうなっていうのは分かるから、別に悪い気はしないし慣れている。「フユキ」の一つ前なのだから「イチハナ」ではない。正しくは「ヒトハナ」だ。一花律子と書いてヒトハナリツコ。そんな風に説明すると彼女は合点がいったように頷いた。せめてハナの字が画数が多いほうのハナだったら少しは洒落てただけだね、みたいなことを自嘲気味に私は言った。だけど難読な苗字の人なんて他にもいくらでもあるし、名前が珍しいというおかげで他の人の名前と紛らわしくて困るなんていうこともなかった。律子という名前がかぶることはあったけれど。

「だけどさ、誰しも一度は『宇佐美』とかみたいな可愛い名前に生まれたかったって思うよね」

「それは『宇佐美』って名字の男の人の多くを敵に回す発言だと思っよ」

私が冗談めかして言うと思はそう言った。もしかしたら彼女も自分の名前は気に入っていないのかな、なんていう風に思ったりもした。この高校はちょっととした私立の学校なので、いろんなところから新入生たちがやってくる。中には当然同じ中学出身の人たちもいるわけだけど、中学が同じだからといって特別仲がいいとも限らないし、クラスが別だったり、多くの場合は新天地さながらに新たな人間関係が構築されていく。

大抵は部活が同じもの、共通の趣味や話題を持つもの、あるいはある種の信号が通じ合う周波数の帯域が近いもの同士がくっついてグループ形成が行われていくものだけれど、どちらかというと凜は

どのグループにも属さないタイプの人間だった。かといってクラスから浮いてるわけでも孤立しているわけでもなく、ただ他人に媚びないだけで、誰とでも仲良くできるような人だ。少なくとも私はそう思っていた。

私はこういうときいつも他の多くの人がそうするように友達を作るために自ら積極的に働きかけることはあまりない。別に人付き合いが面倒くさいとか、他人が嫌いだとかそういうわけではないのだけれど、ただ私は最初のうちとはとにかく仲良くなるうとして互いに親しげな雰囲気で接しておきながら興味や接点が薄れると次第にそよそよしくなっていくようなそんな使い捨ての人間関係がどうしても好きになれなかったのだ。だから私は自然と触れ合う機会が生まれてくるような人とのみ付き合っていくというスタイルを貫いていた。これがのちにも私に奇妙な出会いをもたらすことになるのだけれど、とにかく私はある種の不思議な波長の人間を呼び寄せやすい体質のようだ。大したきっかけでもなかったのに私は自然と凜と打ち解け、親しくなっていた。

「律、絵上手いんだね」

四月も半ばといった頃、その日の最後の授業が終わると凜が話しかけてきた。六限の授業が終わってから担任がホームルームに来るまでのほんのしばらくの時間、教室の中は授業から解放された生徒たちの熱気で奇妙に浮ついている。

「中学の頃は漫研だったからね。くだらない絵ならいくらでも描けるよ」

「でも教科書に描くのはやめようね。何これ全部パラパラ漫画？ただの落書きに何もそこまで本気出さなくても……」

凜は私の詳説世界史Bを手にとってぺらぺらとめくった。ページの隅で女の子二人が喧嘩したり笑いあったり一緒に買い物に行ったりする絵がくるくると現れては消えていく。

「いやあ、こんだけ分厚い紙の束を見るとどうしてもやりたくならない？」

「ならない。シャープペンの芯の無駄遣いだよ、それ」

「このまま放っておくのも紙の無駄遣いでしょ」

「それはない。少なくとも律は授業時間というものを著しく無駄にしてる」

「暇は潰すものだよ」

「潰すな。使え」

凧はあきれたように小さくため息をついて世界史の教科書を私に返した。

担任が現れてホームルームを始めると、各部活にて仮入部できる時期は今週末までだから今のうちにいろんなところを見て回って決めておけ、というような話をした。それから英語の授業でやった小テストの答案やその他事務的な連絡事項など私にとってあまり意味をなさないプリントを配り終わると担任はホームルームを終えて出て行った。私は小テストの答案をクリアファイルの「いらぬもの」として整理しているポケットに突っ込んだ。このポケットの中身は早く家で処分しないとどんどんかさばっていつてしまう。

「凧は何部にした？」

私は後ろに振り向いて聞いてみた。

「文芸部」

凧は教科書を鞆に仕舞いながら答えた。随所にくらだない絵を描きこんでいてもまだぱりつとした新品らしさがある私の教科書と違ってなぜだか凧のは既にくたびれた感じがする。兄弟か姉妹のお下がりであったりするのだろうか。

「教科書いつも全部持って帰ってるの？」

私がそう聞くと凧は一体何を言っているのか分からないといった表情でぼかんと私の顔を見た。

「そんな家でろくに使いもしないものを毎日毎日家と学校までの往復の距離を運輸してるだなんてご苦労様だなあ」

凧は何も言わずにただ軽蔑しきった目線を私に注いでくる。

「それより律はどこにしたの」

「美術部」

「美術部？」

「楽そうだったからだけど……どうかした？」

「いや、何でもない。ただ私も中学のときは美術部だったから」

「へえ、そうなんだ。凜も美術部に入ればよかったのに」

「あいにく絵の具くさくなるのがどうしても嫌でね」

「そっかあ」

絵の具ってそんなににおうものだろうか、と思ったけれど私はそれ以上追及せずにそのまま話を終えた。

「ねえ、りつちゃん。今度うちへおいでよ。どうせ親帰ってこないからさ、泊まっていけばいいよ」

ある日、そんな風に真夜先輩が言った。そういえば、私は真夜先輩の家に行ったことがない。私が美術に入部してから半年以上経つが、私と真夜先輩はずっと二人つきりで過ごしているながらプライベートルドで接することはほとんどなかった。学年も違ったし、学校がある日はほとんど毎日顔を合わせているようなものだからわざわざそれ以上どうしようという発想もなかったのかもしれない。だけど夏休み明けに徐々に真夜先輩と顔を合わせたときはなんだかほっとしたような、よく分からないけれど不思議な安堵感があったのも覚えている。元々私は家でだらだらするのが好きなのでときどき友達に誘われる以外は一人でのんびりと過ごしていた。そういえば前に一度妹と一緒に隣駅まで映画を行ったときにせっかくだからと凜を誘ってみたら妙に妹と打ち解けていたのを思い出した。

真夜先輩の家は私が想像していたよりも随分立派なつくりでちょっと面食らった。だが広い割に玄関の靴は少なく、ゆとりのある空間はなんだかほの暗くてひんやりとしている。真夜先輩が室内灯の明かりをつけてもそのどことなく漂う寂しさは払拭できなかった。

二階には自室とは別にアトリエのような部屋があって、本当に本格的に絵を描く人なんだなあと思った。一人っ子だし、両親は仕事で

ほとんど家にいないからときどき寂しくなることがあるみたいなのとを真夜先輩は言った。なるほど確かにこの広い家で一人つきりじや寂しくもなるだろうと私は思った。

部屋に荷物を置いて、持ってきた私服に着替え、脱いだ制服を適当に鞆の上に載せると私は一階のキッチンで真夜先輩が夕食を作るのを手伝った。シンクの向こうの出窓になった棧の部分にガラスの花瓶が置かれていて、水に挿した花の酸っぱい芳香はどこかよそよそしいような雰囲気を思わせた。

鍋でお湯を沸かして私がパスタを茹でているあいだ、真夜先輩はセロリと人参と玉葱を微塵切りにしてからフライパンにバターを引いて挽肉を炒め始めた。色が変わって肉の香ばしい匂いがしてくると、真夜先輩は刻んだセロリと人参と玉葱をフライパンに加え、またしばらくするとコンソメやケチャップやらその他諸々のよく分からない調味料を加えて煮詰めていく。私はただパスタが鍋の中でぐねぐねにならないように様子を見ながら真夜先輩が調理する姿をぼーっと眺めていた。玉葱とコンソメが挽肉と混じり合いながらなんともいえないあの食欲をそそる香りを漂わせ始めると真夜先輩はフライパンの火を止めた。

いつも自分でご飯作ってるんですか、と私は真夜先輩と二人で食卓を囲みながら聞いた。

「ほとんどね。だからといってやたらと凝ってるわけじゃないけど、料理を作るのもいい気分転換になるし」

真夜先輩は冷蔵庫から持ってきた自家製のポテトサラダを小皿に盛り分けながら言った。

なんだか手馴れててすごいですね、とかそんな感じのことを言っていたと思う。「そうでもないよ、ただ退屈なだけ」とそんな風に答えた真夜先輩の顔は実年齢よりも何歳か大人びて見えた。

食事を終わると真夜先輩はドリップで二人分のコーヒーを入れた。「何か入れる？」と聞かれたので私はミルクだけお願いします、と答えた。真夜先輩は何もいれずにそのまま飲んだ。

「りっちゃんは兄弟か姉妹はいるの？」

マグカップを片手に真夜先輩が聞いた。

コンデンスミルクをコーヒーに入れながら、妹が一人います、と私は答えた。かき混ぜるものがない。私は真夜先輩にスプーンかマドラーがあればくださいと言った。

「ああ、ごめんごめん。私いつもブラックで飲むからかき混ぜる習慣なくって」

そう言いながら真夜先輩はキッチンの引き出しや戸棚をがさごそと探りやがて少し色が変わった銀の小さなティースプーンを差し出してきて、再び椅子に座り直すと彼女は「私も妹がほしかったなあ」と言った。私は自分のことを指して言われたのではないかと思っどぎまぎした。何かをごまかすように私はスプーンでコーヒーをかき混ぜながら、いたらいたで煩わしいことが多いですよ、と言った。姉妹だとか、一人っ子だとか、そういう話は今までしてこなかったんだと思うとなぜだか妙に寂しい気持ちと、過去を悔やむような思いがあった。私は今まで真夜先輩と何を話してきたのだろう。コーヒーを口を含むと私はミルクを入れたことを後悔した。今の私は甘すぎる。

アトリエには紙と木と絵の具の匂いがほのかに漂っていた。部屋の中央のイーゼルに立てかけられたキャンバスには製作途中と思しき絵が描かれていた。周りには他にも同じようにして描かれた絵がいくつも並べられている。

美術部で普段見る真夜先輩の絵とはちよつと雰囲気違っていたので、油絵ですか、と私は聞いた。

「確かに水彩じゃないんだけどね、油彩ともちよつと違うかな。アクリル絵の具っていうので描いてるの」

私は美術部では水彩絵の具を使って絵を描く姿しか見たことがなかったので、真夜先輩がアクリル絵の具での絵も描くんだということを知ってちよつと驚いた。いや、厳密にはアクリル絵の具で絵を

描いているということに驚いたのではなく、ここまで日常的にアクリル絵の具を使っているのならなぜ今まで学校ではいつも水彩絵の具を使っているのかという疑問があった。それを口にするると真夜先輩は「なんだろう、こう、上手く表現できないけれど、それは私にとって特別な意味があるの」と答えた。

「アクリル絵の具を使うことがですか、と聞くと、真夜先輩はこくりと頷いた。

「水彩絵の具はね、ただ純粹に絵を描くためだけに使うの。アクリル絵の具は……なんだろうな、私の生業みたいな」

そこで真夜先輩は不意に言葉を切り、会話の接ぎ穂を求めるように視線をさまよわせて、そしてやがて私の目を見た。

「ねえ。りっちゃんは、描いた絵の中に入れるって言ったら……信じる？」

窓は灰青色の遮光カーテンでしつかりと締め切られていて、ここで寝泊りしたら目が覚めたときに朝なのか昼なのか分からなくなるだろうな、と私は思った。

螺旋階段を下りている。幅の広い、どこへ続いているのか分からない螺旋階段。段差が細かくて、ときどき下りているのか上っているのか分からなくなる。だけどおそらく、下りてるんだろう。音楽のような一定のリズムを持った音が聞こえてくる。ピアノのような細い音色のメロディ。不気味で、それでいてどことなく切なげで、なぜか寂しさを感じさせるような雰囲気漂う。やがて階段は唐突に途切れ、暗く天井の低い迷宮のような空間が広がる。細い路地は曲がりくねり、道が交差する場所では黒い影のようなものが通り過ぎる。人だ、と私は直感的に思った。私は後ろを振り向き、角を曲がって行った黒い影を追う。紅色の階段を上り、まっすぐ伸びた通路をしばらく進むと、右手に白い扉が見えた。緑色の壁の中で、その真っ白い角ばった扉は浮き立って見える。影は扉をノックして中へ入っていった。音も立てずに閉まった扉のノブに、私は再び手を

かける。開かない。鍵を閉めるそぶりなんてなかったのに。私は天井を見上げてみた。映画館とかにあるような黄色い灯火がクリーム色の天井に点々と連なっていた。不意にノブが回され、扉の向こうからまた黒い影が現れた。私は影と目が合った。見つかったと私は思った。

また螺旋階段を下りている。広く、長い螺旋階段。延々と回り続けるうちに私はある種の永遠を感じそうになる。このまま終わりなどこないのではないかという、そういった恐怖心。だが螺旋階段はやがて、私がもうそろそろ終わりになるだろうと思ったところで途切れた。さつきと同じルートだ。明かりが完全に灯る前の水銀灯のような透明感のある黄色い光が点々とあるだけであたりはほの暗く、紅色の絨毯が敷かれた足元には重たい闇が立ち込めている。私はさつきと同じ道を辿り、交差点で影が現れるよりも早く角を曲がった。紅色の階段を上り、果てしなく続く廊下を急ぎ足で進む。扉はまだか。もう行き過ぎたのではないかと思い始めたところで不意に視界の向こうに角ばった白い扉が現れ、私は駆け足になり飛びつくようにノブを握った。扉が開く。私は急いで中へ入った。

一瞬、部屋の中は真っ暗で、私は来る場所を間違えたのではないかと思った。だが私は考え直し、深呼吸をして、目を凝らしながらゆっくりとあたりを見渡した。瀟洒なホテルの一室のような部屋で、分厚いカーテンの向こうに覗く薄いレースのカーテンが掃き出し窓からかすかに星明りをこぼしていた。床の上でぼんやりと白い明かりがゴーストのように揺らめいている。テーブルの上にはガラスの花瓶があり、どこかで嗅いだことのあるような酸味のある香りが漂っていた。さつきまで流れていたピアノの旋律のような音は聞こえず、部屋の中はただ静寂が波のように打ち寄せている。壁にかけられた額に飾られているのは写真なのか絵画なのか分からない。あるいはそれは写真でも絵画でもなくただの鏡なのかもしれない。大きな背もたれのあるソファにはさつきまで誰かが座っていたようなたわみができていた。

部屋の右手には簡単なつくりのキッチンがあり、銀色の蛇口が闇の中で鈍い光を反射させている。左側には続き部屋になったベッドルームがあり、一つのサイドテーブルを挟んでベッドが二つ並んでいる。私は部屋の明かりをつけようと入り口のそばでスイッチを探ってみた。そのときだ。ノックの音が鋭く響いた。さっきの黒い影だ。私が振り向くのと影が部屋に入ってくるのはほとんど同時だった。まずい。見つかった。私はまた影と目が合った。その姿は判然とせず表情も読み取れなかったが、どこか私を咎めているような気配があった。

螺旋階段を下りる。果てしない螺旋階段。不思議なメロディがゆつくりと流れ、一定のリズムで階段を下りていく。ぐるぐると回る螺旋階段は私にオルゴールのシンダーを思わせた。階段は途切れ、いつしかそこは紅い床の迷宮になっていた。私は前と同じ路地を辿り、交差路を曲がり、階段を駆けるように上った。続く廊下を突き進む。白い扉だ。私はノブをつかむ。扉が開く。真つ暗な闇の中で目が慣れるのも待たずに、私は奥の部屋へ進んだ。私は入り口付近の壁を探つて明かりをつけようとして、やめた。スイッチは二つあったが、私はそのどちらも押すことができなかった。ベッドに誰かがいるような気配がしたからだ。それがなぜかは分からないが、私はその人の前で明かりをつけることに抵抗を覚えたのだ。

「何をそんなに急いでいるの？」

女の声が出た。どこか間延びしたような、ゆったりとした声だ。彼女の姿は暗い壁の前で黒い染みのように沈んで見える。ベッドの上で体を起こして座りなおすような動きが見えた。

私は何と答えたらいいか分からなかった。

「どうやってここへきたの？」

階段を下りて、と私は答えた。「その前は？」と聞かれて、私は分からないと答えた。螺旋階段を下りる前はどこをどうやって歩いてきたのか、どうしても思い出せなかったのだ。もしかしたら私は全然別の世界へ迷い込んでしまっていることに気づかずにいる

のかもしれない。「迷子なのね」と彼女は言った。私はこくりと頷いてから、この暗闇の中では頷いたことが相手に分からないかもしれないと思って、再び声に出して返事をした。それから私はどうしたらいいですか、とかそのような感じのことを言ったと思うのだけれど、実際に何と言ったのかははつきりと思いつけない。ただ彼女は私が教えを請うのを見ると、ゆっくりと立ち上がり、私の手を引いてくれた。暗くて表情は読み取れなかったけれど、そのときの彼女はなぜだか微笑んでいたような気がする。ふっくらとした柔らかい手が私の腕に彼女の握力を感じさせたとき、不意にドアをノックする音がした。一瞬のあいだ、静寂が部屋に響き渡り、再びノックの音が突き抜ける。その音は私をひどく不安にさせた。私は彼女の顔を見上げた。彼女は私の目を見た。暗闇の中で彼女はどんな顔をしていたのだろう。彼女は「こっちへ」と言っただけで何も指して私を導いた。壁に頭がぶつかると思っただけで少しのめつただけで彼女が「急いで」と言いながら私の背中を押したので、私はそこへ向かって足を踏み切った。壁は泡のように弾け、水面に顔を叩きつけたときのような錯覚を感じた。スライムのようにどろりと溶けた壁が鼻や口から入ってきて溺れてしまうのではないかと思ひ、私は目を閉じて口を押さえた。私はそれが始めて味わう感覚ではないような、ごく自然な行為であるかのように感じていた。プールに飛び込み、再びプールの底から空中へ抜け出すようにして壁をすり抜けると、私は屋外へ出ていた。後ろを振り向いても、もうそこに壁はない。私は元から外にいたかのように、夜の街角でぼつんと佇んでいた。

空は容赦なく黒く、針で刺したような星が二つ三つ瞬いているだけで、あたりは海の底のように深い闇に沈んでいる。黒一色に染まった闇を背景に赤い光や橙色の光、青い光や紫色の光がネオンサインのように消えたり現れたり、くるくる回ったりしながら道の上を浮遊している。それは空中を漂う看板のようにも見えたり、あるいは自意識に目覚めた機械がさまよっているようにも見えた。外灯は

高いところに浮かんでいて、緑や紫、オレンジといったでたらめな色をつけたり消したりしていた。足元に目を落とすと私は地面も鈍く光っていることに気づいた。道路を舗装するように連なる光の線はあるときは放射状に、またあるときは網目状に絡まりながら続いている。歩きながら眺めると足元の光は鮮やかな赤色になったり鈍い青色になったりした。

緑色の光に包まれた病院の前を通り過ぎると、不意にどこか遠くでサイレンの音が鳴っているのが聞こえた。不気味な光を放つ病院の角を曲がると、真っ青に染まった「止まれ」の標識がふらふらと揺れ動きながら宙を浮いて私の横を通り過ぎていった。路上の先を見ると信号の灯火が三つとも全部赤だったり赤でも青でも黄色でもない色が灯っていたりしている。

「ねえ」

奇妙な光の群れが浮遊しながら往来する道を横切つてなんとか向こう側へ渡れないかと思案していたとき、不意にどこかから声をかけられた。

私は左を見て、右を見て、そして後ろを見た。どこにも私に声をかけたと思しき姿は見当たらなかった。だが、再び視線を前に戻すと、それは私の目の前にいた。

「あなたどこからきたの？」

大きな瞳がしっかりと私を捉えていた。絵の具の染みのように浮かぶ黒い影。

分からないと私は答えた。ホテルの部屋のような場所から抜け出すと、唐突に街のど真ん中に出たのだと。

「よそからきたんでしょ？ キョロキョロしてるから分かるよ。帰り道が分からないの？」

私は言われるままに首肯する。

声の調子や喋り方からして女の人だとは思っただけけれど、その姿形からではそれが男なのか女なのか、歳はいくつぐらいなのかは判然としない。背丈は私とほとんど変わらないと思ったが、足元を見

ると彼女は下半身がなく、胴体だけで宙に浮いていた。

「ついておいで。案内してあげるから」

そういうと彼女は私を手招いて光の群れが往来する中を横切っていく。私は他の光と衝突しないように気をつけながら彼女のあとをついて道を横断した。L字型のレモンイエローの光が丁度私の背後を通り過ぎるとき奇妙な電子音が聞こえて私は少し寒気がした。

どうしてこの街はあんなに変な色で光ってばかりなんですか、と私は半身の女性に聞いた。

「色？ 光？ ごめんなさい。私、すごく目が悪いの。あなたの顔も間近に寄らないとぼやけて表情が見えないくらい」

彼女は道を渡り終わると振り向いて言った。

「あなたにはどんな色が見えるの？」

興味深げに聞いてくる彼女の瞳は黒く大きく、なぜか私に幼い頃遊んだくまのぬいぐるみのことを思い出させた。

赤とか、紫とか、とにかくいろんな色が見えます、と私は言った。

「赤……紫……」

彼女は再び前へ進みながら、私の言葉を反芻させた。私は彼女の隣に並んで歩いた。赤い煉瓦の塀が道なりに続いていて、その向こうには古ぼけた大きな洋館が見える。犬の散歩のときに使うリードのようなものが彼女の隣を通り過ぎていった。

「例えばこれはどんな色に見える？」

半身の女性はぴたりと止まって、道端の植木を指して言った。生い茂った葉は鈍い青紫色の光を放っている。

青く見えます、と私は答えた。

「青……か。私にはオレンジ色に見える」

私には一瞬何のことを言っているのか分からなかった。葉のことですよね、と私は再び植木を指して言った。

「そう。私はまともには色が見えないの。正しくは、色の見え方が全く違う、って言うべきかな」

色弱とか、色盲とかいった類の言葉が私の頭に浮かんだ。色盲の

人は色が全部モノクロに見えるものだと思っていたから、私は彼女の言っていることが現実味のない妄言のようにすら思えた。

「私も昔は普通の人と同じようにちゃんと色が見えてただけどね。でもあなたの目からはこの街がそんなに不気味な色をしているように見えるなんて、言われてみないと気づかなかった。元々色の見え方がおかしいからさ、おかしい色に見えるのは私だけだと思ってた。でも生まれつき色盲の人は、自分が色盲であることにすら何かきっかけがないと気づかないんだよね」

半身の女性は「あっちのほうへ行けば元の場所へ戻れるから」と言って通りの向こうで繁華街のように見える場所を指し、私についてくるよう促した。

そこは私と半身の女性以外にも人のように見える黒い影の往来が激しく、あちこちから話し声が風の囁きのように聞こえてくる。あたり一面は静かな賑わいに満ちていた。

半身の女性は私の手を引いて裏路地のような狭い通りへと潜り込んでいく。人気のない静謐の狭間で彼女は速度を緩めることなく奥へ奥へと進んでいく。私はときどき足が水溜りのようなものを踏むのを感じた。一度、冷たい風が吹き抜けていき、肌寒さを感じて私はもしかして場違いなほど薄着でいるのではないかと心配になった。だがすぐにあたりは再び生暖かい空気に満たされ、一瞬感じた寒さは単なる勘違いであったかのように霧散した。

「ここ」

眼下にぼつかりと空いた空間を指して半身の女性は言った。居酒屋とかにあるみたいないな地下へ続く階段だ。

下りた先の地下通路は床が青く光っている。ブリキの扉をがちゃりと開けると、そこからは紅色の床の通路が続いていた。

「ここからきたんでしょ？」

ノブをつかみながら半身の女性が言った。喋ると白い歯に青い光が反射して気味が悪い。

「たぶん出口まで行けると思うから、ついてきて」

そう言つて半身の女性は紅色の床の上に躍り出る。私も続いて中へ入り、後ろ手でブリキの扉を閉めた。ばたんと重厚な音が足を伝つて腹まで響くのを感じる。私はまた元の場所まで戻つてきたのだと思つと、夜の街へ出る前にこの通路の中をさまよつていたのが遠い昔のことであるかのように感じた。

ふわふわと浮かびながら半身の女性が先導する。薄暗い通路で黄色い灯火に照らされた彼女の姿はうつすらと透けて見える。

角を一つ曲がり、階段を降り、また角を曲がるとしばらくまっすぐの通路が続いた。途中、顔の見えない黒い影とすれ違った。背が高く、きびきびと歩くその仕草は若い男性のものではないかと私は思った。私は振り返つてその影をもう一度見てみたが、よく見るとそれは顔が見えないのではなくそもそも顔がないのだということに気づいた。

「あんまりじろじろ見たらだめだよ」

前を進む半身の女性が言う。

「ちよつとでも怪しまれるとすぐにつまみ出されるからね気をつけてね」

そんな風に彼女が言ったとき、私は左手の壁に白い角ばつた扉があるのに気づいた。危つく見落とすところだった。

私が立ち止まつてその扉を開けようとする、彼女は「何？ 出口はまだ向こうだよ。何か用事があるの？」と訝つた。

ここを開けてください、と私は言った。自分の手では開かないと思つたからだ。だが扉はあつけなく開いた。

「ごめん……私はその部屋には入れない。用事があるなら、ここで待つてるから早く戻つてきてね」

半身の女性は少しあとずさつて、後ろの壁にもたれかけた。私は彼女に目配せをしてから、部屋の中に入って扉を閉めた。

さつきと同じだ。

前と同じ、瀟洒なホテルのような部屋。濃厚な花の香りが闇の中に満ちていて、締め切られたカーテンの隙間からこぼれる星明りが

白いもやのように床の上で揺らめいている。私は迷わず奥の部屋へ向かった。

「真夜先輩ですよね？」

私はベッドの上の人影を確認するまでもなく言った。間違いなく彼女はそこにいる。

「どうしてこんなところにいるんですか。なんでこんなことしてるんですか。早く元の世界に帰りましょうよ」

ベッドの上で影が動き、衣擦れの音がする。

「私はこの世界でしか生きられないの。うっん、違う。私はそもそも生きられないの」

真夜先輩はゆっくりと言葉を紡ぎ始める。

「私が生きるために作り出したのが、この世界。私の絵は、私の世界を作り出すことができる。いや、少し違うかな。私の絵は、私を絵の世界に閉じ込めてしまう。私はそれが最初、私が絵に描いた通りに世界を変えることができるものだと思ってた。でも違ったのね。私は私の絵の中に新しい全く別の世界をもう一つ作り出しているに過ぎなかったの。気がついたときにはもう手遅れで、私はもはやまともに元の世界にとどまることができない状態になっていた。だからどの道、私はもう絵の中でしか生きられない体になってしまったの。私が、私であるということを持続するためには、私の世界を作り続けるしかなかった。だけどね、私の世界は何度作ってもまたいずれ崩壊してしまう。夢から覚めるみたいに、私の世界はなかったことにされてしまう。だから私はよりリアルで磐石な世界を作り、その中へ入り込んで次々と上から補強するように私の世界を作り続けるという方法を取ったの。分かる？ どれも仕方ないことだったのよ」

「何訳の分からないこと言ってるんですか。先輩は私に嘘をついています。まだ私に隠していることがあります」

暗闇の中で真夜先輩の表情は窺えない。それでも私は真夜先輩と確かに目を合わせているのを感じた。

「去年の美術部のもう一人の部員って、凜だったんですよね？ 色が見えなくなったらから美術部を辞めた。それが生まれつきのものでしたら途中で辞めたりしませんよね。成績優秀な凜が留年しているのも怪我で入院していたから。色覚が失われたのはその後遺症。先輩が私に去年一緒だった人の話をしないのも、凜が美術部の話題を不自然に避けるのも、これで全て辻褃が合う。違いますか？ 私がなんにも気づいてないとも思っていました？ 去年、凜と何があったんですか？」

返ってきたのは沈黙だった。私たちはまるで最初から会話などしていなかったかのように押し黙り、そしてまた不意に口を開いた。「私が凜を巻き込んだの。最初のうちは、凜は私に協力してくれた。でも凜は私のせいで体の半分を失った。だから私はもう、これ以上巻き添えを増やさないうちに」

「何言ってるんですか。そんなのただ問題を遠ざけてるだけじゃないですか。ただ自分がいなくなればいいなんて……上手くいえないけれど、それってなんかずるくないですか？」

「だから私が責任を取って」
「違います。先輩がしていることはただの現実逃避です。だから私を呼んだんですよね？ 私を連れてきたのも本当は止めてほしかったからですよ？ なんでもっと早く言わなかったんですか？ 先輩にとって私はその程度の信頼にも値しなかったんですか？ こんな方法しかなかったんですか？ 私は……私はこんなの納得しません」

「じゃあどうするつもりなの？」
「あなたを連れて帰ります」

私は室内灯のスイッチを二つとも押した。ぱちんという音が二つ重なり合って鳴り響いたとき、部屋の中は真っ白い光に照らされ、そして跡形もなく消え去った。

「律！ 律！ 大丈夫！？」

私を呼ぶ声がする。

目を覚ますと、まず凜の顔が見えた。そして目にしみるような青い空。

「よかった。ずっととうなされてたから……どこか痛むところはない？」

凜の顔は私の記憶にあるよりも随分と大人びて見えた。まるで私を置いて凜だけ先に歳を取ってしまったかのように。

「凜……頬、怪我してるよ」

私は凜の唇の横の、あごのあたりにある見覚えのないえぐれたような深い傷跡を指して言った。

「何言ってるの。こんなの前からだよ」

どこかで炸裂音がして、地面越しに振動が伝わってくる。瓦礫の上に横たわっているためか体のあちこちがずきずきと痛む。

私はいくつかのおかしなことに気づいた。ここはどこだ。私はさつきまで誰かの部屋の中にいたような気がする。もっと平和で安全な。

「凜。いくつか質問していい？ 私はどのくらい眠ってたの？」

「ずっと気を失ってたよ。一時間くらいかな」

また炸裂音。弾丸が金属を撃つ音がする。地響きとともにぱらぱらと瓦礫が崩れ落ちる。

「そう……それと、今日は西暦何年何月何日？」

凜は気の毒そうな顔をした。

「よほど悪い夢を見たんだね……今はもう西暦じゃないんだよ」

私は、ついさつきまで自分が高校生だと思っていたのは単なる錯覚に過ぎないのだということを理解した。

「凜。もう一ついい？ コンスタンティノープルを陥落させ東ロー

マ帝国を滅ぼしたオスマン帝国第七代皇帝は？」

「メフメト二世」

凜はあきれたような顔をして、それだけくだらないことを言えるなら大丈夫だろうとばかりに立ち上がった。私も体を起こして起き

上がる。背中や後頭部には鈍い痛みが残っていたが、大したことはないだろう。私は服についた砂埃をはたいて落とした。

「早く移動しよう。歩ける？」

そう言っただけで私は手に手を差し伸べてくる。瓦礫が散乱して不安定な足場だったので、私は素直にその手を取った。

視界の彼方では鈍色の薄い雲が稜線にこびりついている。

見上げた空は、手を伸ばすにはあまりにも遠すぎた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8919p/>

呪われた少女の世界

2011年9月30日03時16分発行